

「青春」の思い出と生涯現役を目指して

梅田富雄 (2009.9.25)

平成 21 年、大きく政治の方向が変わろうとしている。成熟期に入って変革せざるを得なくなったと解釈できる。東工大関係者が中枢にいる初めての政権、担当する人たちにとって、これから青春を迎え、大いに頑張ってもらいたいものである。

我々に共通の青春時代は、大岡山で過ごした 4 年間であろう。勉学に加えて、遊びや恋愛、趣味に興じる日々であったと思う。個人としてそれぞれの青春時代を過ごしたが、多くの同期生にとっての共通の話題は、社交ダンス、麻雀、卒業記念の四国、九州への旅行などであろうか。先日も編集会議で話題になった末沢先生から私語を嫌ってのチョーク投げ、海賊版の化学工学関連洋書購入など、記憶している諸氏もいるかも知れない。卒業後、人生の大半を職業人として過ごしたことを念頭におき、その 30 年の期間を、揺籃期は、入社後数年、その後の 10 年程度を青春期、さらにその後の 15-20 年を壮年期と考えてみた。業務に精通して充実した日々を過ごした時期としての青春時代について、多くが語られていないのは残念である。かつて「私の履歴書」を掲載してもらったが、その意図するところはそれぞれの履歴書を諸氏から期待してのことであった。

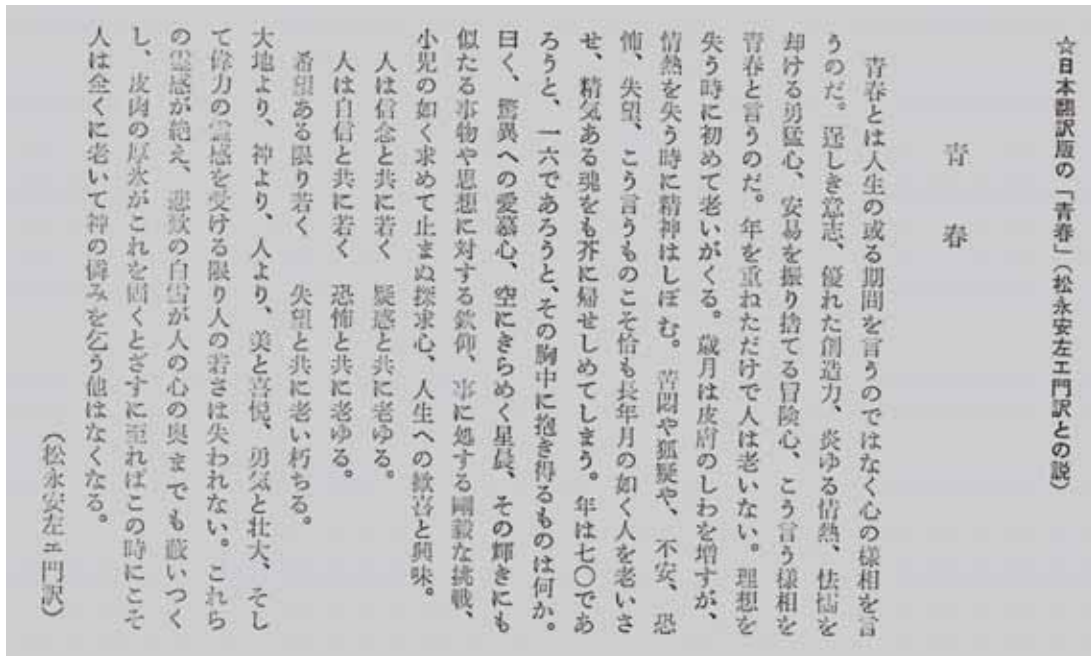
我が国の高度成長を支えてきたとの自負をもって、情報開陳していただきたく、今後の投稿を多いに期待したい。

さて、これから述べる「青春」(カッコつきに注目)は、サミュエル・ウルマンの「青春」を指しており、この詩との出会いについてのエピソードである。この詩に出会った

いきさつは、次のような 1982 年 7 月に日本経済新聞のコラム欄「明日への話題」の宇野収氏が書かれた「青春の詩」との出会いである。

当時、第 1 回プロセスシステム工学国際会議を京都で開催することが決まり、そこでキーノートスピーチを行うことになっていた。欧米の国際会議では、気分転換や話題を変えるために種々の差し込みをしているのをしばしば見かけたので、私もそれをやることで何かないかと探していた。そんな最中、この記事にお目にかかった。

この資料は、オリジナルのようで、別に John .W. Lewis からダグラス・マッカーサーに贈られ、執務室の壁に掲げられていたといわれるもの、次の資料はその和訳(松永安左エ門訳との説)であり、宇野 収氏の記事で紹介されている。



この辺の情報は、この後、千代田化工の図書室長をされていた作山宗久氏の精力的なウルマン研究の結果出版された“「青春」という名の詩”から引用したものである。



作山氏は、その後”From The Summit of Years, Four Score”を翻訳され、「青春とは、心の若さである」というタイトルで訳本を出された。久し振りに「青春の詩」を読み直していて、次のページ (p.14) が目に留まった。

一九八二年の正月、一枚の年賀はがきが私の目をひいた。
Years wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul.
(歳月は皮膚にしわを寄せるが、熱情の喪失は魂をしぼませる)
デール・カーネギー協会のS先生からの賀状である。誰からの引用句かな、と思った。
一月五日、千代田化工建設(株)の社内報「ちよだ」一二五号を受け取った。その中で、玉置社長が年頭の所感を述べている。
技術が日進月歩である以上、技術会社に停滞と老化は許されません。組織も然りでありませぬ。サムエル・ウルマンという詩人が、
青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。優れた想像力、たくましい意志、燃える情熱、安易を捨てたる冒険心、こういう心の様相を青春と言うのだ。
一六歳であろうと七〇歳であろうと、年齢に関係なく、「人は信念と共に若く、疑惑と共に老いる。希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる」と言っています。
ウルマンの名を初めて知った。新年を祝うにふさわしい詩は心に残像を残していちど消えた。
翌一月六日、私の席に同じ会社のJさんから「サムエル・ウルマンの詩の原文を探してほしい」という要請があった。「社長が年頭所感に引用されたものです。四月の国際会議のキイノート・アドレスに引用したい。とても良い詩なんです」ということであった。
私は、洋書目録、人名目録、エンサイクロペディアなど、ドイツ風の名前の綴りをあれこれ組み合わせてライブラリーにあるものを全部調べたが分からなかった。
数日後、Jさんから一九八一年二月一四日付、日本経済新聞夕刊の「鐘」欄のコピーが届いた。

ここに書かれているJさんとは私のことである。この中で、玉置新社長が年頭の所感でウルマンを引用されていたことは記憶していない。

第1回 PSE International Symposium(1982年8月)が京都国際会議場で開催され、Process Synthesisについて講演したが、今のようにパワーポイントなどが使用できる状況ではなかったので、資料がなく、どのように発表に使ったか、はっきり覚えていない。

い。この国際会議のシリーズは、その後3年ごとに欧米その他で開催され、現在も継続して開催されている。

このころはまさに私にとって職業人としての青春時代であったように思う。組織(プロセス技術部)のメンバーと共同研究を精力的に行い、しばしば論文発表を行い、千代田の名前が国際的に関係者の間で広く知れ渡ったような実感を持つことができた。高度成長期とともに、充実した技術者生活をエンジョイすることができた青春時代であった。最近では、生涯現役ということがしばしば言われますが、ウルマンの詩の通り、まさに青春を謳歌し続けることは心の持ち方次第であると実感している。「青春の詩」の一部にある“人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる”は、幸せを掴むキーワードかもしれない。年を重ねた物理的？な結果をフォトにしてみた。



(1982年8月、左から、京都大学高松武一郎教授(故人)、東工大 大島栄次教授、私)

みんな若々しく、今では、このメンバーや他の人たちと海外の国際会議に参加した時のことが楽しく思い出される。その後現在まで、勝手に生涯現役を決め込み、知的活動に時間を当てている。エンジニアリングとマネジメントの統合化に関わる論文や記事を書いている今日この頃であるが、最近お目にかかっている諸氏に対して、先の若かりしときは違う現状をお見せすることも必要と思い、ここに、今年初めに写したフォトを掲載した。あれから27年経って、随分年を重ねてきたを実感する。

なお生涯現役といえば、東工大化学工学の先輩、小松昭英氏、小嶋幸保氏とは、化学工学会経営システム委員会でしばしば議論をしたりして、ともに知的活動を通して楽しんでいる。

生涯現役のすばらしいサンプル例を一つ紹介したい。それは内田君の父親である

東工大元学長内田俊一先生が 85 歳の時のことである。新宿の京王プラザホテルで開催された太平洋化学工学会議では、手持ちの原稿なしで 45 分間のスピーチをなさったことを思い出す。これは、まさに驚異的で、先生はそのとき、まだ青春時代であったのかも知れない。



今から10年近く経ったときに、当時の先生と同じ時期になるはずであるが、果たしてどうなっているか、知る由もない。

「青春」の思い出として、関連しそうな話を書いてみて、改めて、ミネソタ大学に留学中は、あれほど真剣に勉学したことは未だかつてなく、今日の生涯現役を可能にしている基礎をつくった時代であったように思う。

終りに当たり、そのころを思い出して、Quiz を一つ提供したい。頭の体操にしばしの時間を使ってみてはいかが？

Quiz: 1 辺の長さ L の立方体のアイスクューブ (例えば1辺 1 インチ) は常温の部屋に放置すると、どのくらいの時間で完全に溶けるか？

ヒント: 氷の全表面から入熱があり、溶けると、体積が減る。

解: $T = (\Lambda d / 2U \Delta t)L$; Λd は溶解熱・密度、 $U \Delta t$ は総括伝熱係数・温度差

(モデルの詳細度で解が変わるので、簡単なケースとして求めたことを付記する)